
Risk one's life

熊取

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R i s k o n e ' s l i f e

【Nコード】

N 6 4 2 6 D

【作者名】

熊取

【あらすじ】

地球上でNo.1の強さになった者が別の世界に行く果たしてどうなるのか？様々な世界を巡らされることになった青年の冒険記

Departure・出発（前書き）

この小説は他サイトに載せたことのある物です。

Departure - 出発

今、全身を黒の服で統一し、肩まで伸びる漆黒の髪少年、否青年が目の前で床に伏している人だった者の上に浮かんでいるというより、漂っている何かと対峙している。

その何かは人の形をしているように思えるが、人ではないように思われた。

口元には怪しい微笑みを浮かべ、髪は胸元まで延び、着ているのは、薄い白色の衣の下にこちらも黒の服だが、何故だかこの闇夜に淡く輝いていて、中空に座っているのだ。

その何かは、青年に話し掛けた。

『貴方は、此れで何を得たんですか？』

「・・・・・・何も、だが他にしたいこともない。」
フツ、何で俺もいきなりこんなやつに・・・・・・

『貴方は何が為に斯様な事を？』

「・・・・・・俺は、此の一瞬のみ満足できる。それだけだ、だがそれももう出来ないだろう。今まではこいつが居てくれたが、俺にはもう倒すべき者が居ない。・・・・・・実際にいつも大した事は無かったがな。かすり傷一つ負わされただけだった。」
青年は目の前に転がっている者を一瞥すると、いかにも詰まらなそうに、そして吐き捨てるように言い切った。

『貴方は何故此处に居るんですか？』

凜とした鈴の様な音で訊ねた。

「何故、・・・何故・・・か。そうだな、何故いるんだろう。もう・・・何もないのにな。」

遠い所を見る様な眼で自分に言い聞かせるように言った。

『そうですか。では、これからは私のために動きなさい。
動く目的を与えます。』

目的のために生きなさい。
生きるために巡りなさい、

この世の理じやら逸脱し、他の世へ。

巡り巡って、その先に何が在るかは分かりません。

ですが、此処で静かに音もなく倒れるのは頂けません。

なら、その命私の為に使いなさい。

これから、貴方は別の世へ行かなければなりません。

宜しいですか。』

この時、何故だか俺は笑っていた。恐らくまともな精神状態では無かったのだろう。それもそうだ、まともな訳がない、俺はこの世が嫌いだ。そんな時にこんなことを言われた。現実的では無かった、だが、俺はこいつの話を全て信じ切っていた。もしかすると、こいつがそういう力の様なものを使っていたのかも知れない。俺にはそんなことさえもどうでも良かったのかもしれないが、とにかくこれから何かが起こることさえ分かれば、それで充分だった。

「ああ、良いぞ。早くやれ。・・・だが、一つ言
っておく、俺は俺の為に生きる。誰のためでもない、自分のためだ。」

その時、相手も笑っていた気がした。

『分かりました。では、貴方なりに頑張ってください。全てが終えた

らまた、貴方の前に現れるでしょう。・・・左様なら。
この言葉を全て聞き終えた時には俺の意識は既に無かったが、

『くれぐれも気を付けて下さいね。』

何かを言っているというのだけは分かった。

T h e f i r s t w o r l d E x o r c i s m (前書き)

この小説の元は前に一度他サイトに載せたことのあるものですが、
大幅な手直しが入っています。

The first world Exorcism

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

青年は目覚めた。

そして、此処が何処だか考えようとしたが、直ぐに止めた。
何故なら、無意味だからだ。

例えば此処が森に囲まれていてかなり怪しいところだとしても、来た事もない様な所のことなど誰にも分かりはしないからだ。

そう、分かりはしない・・・・・・来た事もない世界の事など。

もう此処は地球などでは無い、いや、それはまだ定かではないが遂さつきまでいた地球とは別の次元なのである。

この少年はあのよく分からない物の事を微塵も疑うことなく今の現状を受け入れようとしていた。

そして、何故信じられると言われたら直ぐに彼は言い切るだろう・・・勘・・・だと。

・・・どれぐらい眠っていたんだろう。

・・・それはいいか別に、其れはそうとこれからどうするかだな。

あいつ、・・・俺にホントに何も言わなかったからな。

彼はそう思った後に、一つ溜息をつくと起こしていた体を寝かせて仰向けの状態になり、寝転がって上を見上げると苦笑しながらポツポツと言いだした。

「ハハッ、・・・この世界の空は綺麗だな。

本当に別の世界だったんだな。別に疑ってはいやしいけど・・・

・・・

・・・なんで、・・・こんな。」

そして、段々と眠くなってきた時だった・・・
・・・高い澄んだ声の女の子の声が聞こえて来た。

そして、直ぐに体を起こすと声のした方に走り出した。

そのスピードは常人のそれではない。

それどころかもう人間の域の擦れ擦れ位だろう。

何せ、彼の速さはオリンピック選手よりも上だったのだから。

それに、彼の走りの他との違いの一番は身のこなしにある。

どんなに早く走っても音が鳴る事もない。

その動きからは歴戦の覇者も思わせる。

彼は駆ける、駆ける、一心不乱にその子のもとへ。

いや、違う。

彼が向かう先にあるのは、彼の心を満たしてくれる。

何時もと違う変化という簡単でも貴重な彼が何をしてでも得たいと望んだ事象そのものだった。

声の聞こえた場所には直ぐに辿り着いたが、彼はその時見た光景に少しの間魅入られることになった。

この時の光景はどのような経緯でこうゆう風になるのかは分からなかったが、今までに見た事もない様な筋肉質のゴリラと言うよりはどちらかと言うと熊に近い様な2m以上もの大きさの不細工な生き物とは対照的に、酷く華奢でか細い140cm程の小さな女の子？が向き合うように立っていて、熊の方は鼻息が荒くて落ち着きがなく今にも襲いかからんといった感じで、子供の方も落ち着きがないという点では共通しているが、こちらは熊とは違って興奮ではなく恐怖によるものだった。

そして、二人はお互いの方を向いたままの状態で緊張感はじょじょに高まっていく。

段々と熊の鼻息は荒くなっていき、少女の方は足の震えが速くなる。

カクツ、と不意に少女の膝が音もなく折れて地面に着いた。

その瞬間今まで荒く息をしていただけの熊が動き出した。

熊は一気に間を詰めると、もう駄目だと言わんばかりに頭を腕で抱えた少女目がけて上にあげた尖った爪のある右の腕を……………
・・振り下ろした。

ドカツッ!!

だが、突然動きだしたのは少女だけではなかった。

今まで物陰で気配を完全に消していた青年が熊が動き出すのとはほぼ同時に動き出し、熊よりほんの若干早く辿り着くと、無防備な少女のお腹を蹴って吹っ飛ばした、熊の標的を変えて来た攻撃を少女が飛んで行った方向に跳躍してかわした。

吹き飛ばされた少女は思ったほどの衝撃では無かったが、それでも吹き飛ばくらいなので無事で済むわけもなく、ゲホッ、ゲホッと息を吐いている。

彼はその子に近づいて言った。

「腹、蹴ったりして悪かったな。だが、何も言わずにさつさと起きてどっかに行け、……………悪いがアイツはおれが貰う。」

この時、彼の頭の中はあの異形の物を倒すという闘争本能でほとんどが満たされていたが、少女の蚊の鳴くような声をなんとか聞くことができた。

「済みません。」

たったこれだけの言葉だけを残して少女は森の中へと駆けていき、直ぐに見えなくなった。

何でこんな言葉を残したんだ・・・・・・・・・・・・・・・・..
うか、・・・・・・・・・・ククツ・・・・・・・・・・ククククツ、
そうか、アイツは俺が殺されると思ったんだな。

アイツは、・・・・・・・・・・そんなに強いのか。

せいぜい楽しませてくれよ。

Like a blast

少女が走り去っていくのを見届けて青年は敵と対峙した。

「ハハッ、お前見かけによらず随分優しいんだな。あの子が逃げるまで待つてくれるなんて。」

相手は一度襲いかかって来てからその場を少しも動かずにグルグルと唸っている。

『…………ツ・メテ・レ…………』

何だ。

『…………コ・ツヲ・テクレ…………』

こいつが言ってるのか。

今までより集中して聞いてみた。

『…………コイツヲトメテクレ…………』

今度は鮮明に聞こえた。

そしてこの声の異質さにもきずいた。

今集中して聞いているとかなり大きな声に感じるのだが、気を外すと聞こえなくなる。

何よりこれは耳の入るのではなく頭に直接響いてくるのだ。

「フツ、言われんでも殺してやる……………能書きなんていらないからさっさと始めようぜ。」

この言葉とともに今までの感じとは変わって殺気を出し始め、それだけで周りの生き物は逃げ出した。今や周りにいるのはこの一人と

一頭だけになった。

「いい死合にしような。」

彼 対グリズリー

単純能力値

25対30

1人と一匹は黙ってお互いを見つめ合う。

この状況を邪魔する者はもはや周りの生異物の中にはいない。

彼らは何か切っ掛けを欲している。

何か変化がなければ彼らはずっと互いをそれこそ死ぬまで見続けるだろう。

だが、そんなものはこの星の神が許しはしない。

だからいるのかいないのかはつきりとした確証はとらせない存在が
気まぐれに突風を起こした。

この突風は周りの塵を含んで彼らの間に割って入った。

その瞬間その瞬きをする間のコンマ数秒だけ熊の視線から彼が完全
に見えなくなった。

グリズリーは突風が過ぎて前を見るとそこには既に彼の姿はなかった。

彼は突風が吹きぬけるその数瞬の間にグリズリーの所まで駆け寄り、

懐の視界の外の部分に4脚で地面に立っていた。

そして、4脚を曲げて反動を付け、飛び上がる。

彼は右膝を少し前にやり、グリズリーの顎に入れた。

グリズリーの体は2m以上もあり、さらに筋肉で重さはかなりの値になっているのだが、軽く浮かび上がった。

次に彼は駆け寄る際に拾った石を左手に握り、鳩尾に叩き込んだ。常人なら骨の骨折程度では済む筈も無いこの攻撃もこの化け物ならひびにもならない怪我で済んだ。

マジかよ。結構手応えはあったのにな。

やっぱり素手でやろうってのが間違いなんだよな。……………素手で。

グリズリーは彼に地面に叩きつけられて軽い呻き声を上げた物の直ぐに落ち着き、彼を目がけて爪を振るう。

彼はその腕を後ろに飛んでかわし石を投げ捨てて、上着の内ポケットに左手を入れ、中から得物を取り出し、着地と同時に構えて相手に向かい放つ。

ズガウウン！！ ブシュー

彼の唯一であり生涯のパートナーでもある物心付いた時から一緒にいた得物は銃である。

銃から弾きだされた銃弾は真っ直ぐに相手の胸に命中したのだが、銃を持ってしても軽く血が噴き出す程度で済んだ。

グリズリーは片腕を付いて起き上がると彼に向けて体当たりを仕掛

けた。

それを急いで横に飛んで避けて逆立ちに片手を地面片手を銃という状態でまた一発放った。

今度は熊が両手を顔の前でクロスして弾丸を受け、彼が起き上った所を見計らって両腕をクロスさせたまま振り下ろした。

ザシュッ！！

グリズリーは確かな手応えを感じて少し気を緩めた。確かに手応えは勘違いではなく存在していた。だが、切り裂いたのは人ではない。引き裂かれたのはそこらへんのどこにでも落ちていそうな50cm程の太い木の枝であった。

そして、それに気づいた時にはもう遅かった。彼は攻撃の瞬間に敵が自分を見ていない事が分かると木を身代わりにして、自分は上に跳躍していた。

流石に此处なら幾らお前でもダメージ大だろ。

喰らえ、クイック、

ドダウン！！

ブシャーッ！！

やはりお前もそこは弱点なのか。

グリズリーは顔を抑えて蹲った。正確に具体的に言うと、目を抑えて地面に倒れ、のた打ち回りながら呻きだした。

これで終わりだ。

お前の望み、叶えてやるよ。

「おい、木偶の坊!!」

彼は目に銃弾を打ち込んだ後、グリズリーのちょうど真上に位置する所に聳え立っていた大木を一気に駆け上がると大きな声で呼びかけた。

すると、彼の思惑どおりに相手は両腕を声のした方に向って乱暴に振り回し始めた。

その姿は滑稽で、隙だらけであり、彼からしてみたら殺して下さいとも言ってるみたいにさえ見える。

20メートル程の高さから彼は目標に向かって足を蹴った。

そして、相手の腹に逆向きに持った銃を叩きこむ。

ボキッ、という鈍い音と共にグリズリーの腕の動きが止まり、動かなくなった。

こうして、異世界での初戦闘は彼に軍配が上がって幕を終えた。

『アリガトウタスケクレテ』

この言葉を聞き終えると怪物は数多の光となって消えていった。

彼 対グリズリー

彼の勝利

最終戦闘能力値

彼

森の地形利用
5

銃
10

40対30

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6426d/>

Risk one's life

2011年1月5日14時06分発行